

火山災害の痕跡の観光対象化に関する研究

——磐梯山1888年噴火を題材として

*A research about the Utilization of traces of Volcanic Disasters:
after the 1888 Eruption of Mt. Bandai*

橋本俊哉 [立教大学観光学部・教授]

HASHIMOTO, Toshiya

Summary: The purpose of this paper is to evaluate the utilization of traces after the volcanic eruption as tourist objects. Aimed for this, a monitor tour organized for the purpose of recognizing 'the grace and threat' for both residents and visitors. First of all, the results of 3 years field research for finding traces after the eruption of Mt. Bandai 1888 for the potential use as tourist objects. Based on this, a monitor tour was conducted, the answers of questionnaire for participants was analyzed. As a result, the monitor tour was beneficial effects for both participants who had special interests for the history of his own land and residents who helped the tour as interpreter.

Key words: 磐梯山噴火 (eruption of Mt. Bandai), 防災教育 (disaster prevention education), 北塩原村 (Kitashiobara Village), 猪苗代町 (Inawashiro Town)

I 研究の背景と目的

II 2016～18年度の調査内容

1. 「慰霊碑」の実態調査
2. 被災集落での調査
3. 地元中学のフィールド学習への同行調査

III モニターツアーの実施

1. モニターツアーの企画とコース選定
2. モニターツアーの催行

IV モニターツアーの評価

1. 参加者を対象としたアンケート結果
2. 結果の分析

V 観光を通じた「防災教育と教訓の伝承」

1. モニターツアー参加者の防災意識の向上
 2. 観光の導入による地域住民の意識変化
- おわりに

I——研究の背景と目的

自然災害が発生すると、地域は変容を余儀なくされ、その影響が長期化する地域と速やかに復興・発展する地域とが生じる。観光地では、観光自体の再生に差異が表れる。とくにわが国では近

年、以前にも増して自然災害が頻発しており、観光地が有する自然災害への耐性に関する研究の蓄積は、観光研究においても喫緊の課題である。

筆者らの調査プロジェクトチーム(以下「調査チーム」)は、こうした問題意識に沿って、「災害に強い観光地」が有する条件に関する調査研究を進めてきた¹。そのプロセスにおいて筆者は、地域社会が有する災害への耐性の視点を観光地に応用した理論的枠組みとして「災害弾力性」²の概念を提起している(橋本、2016)。

災害弾力性を高めるために地域が有すべき重要な視点のひとつに「防災教育と教訓の伝承」が挙げられる。2011年の東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)以降、災害教訓を伝承することは「住民の責務」であり、国や地方自治体等の政策としても防災教育が努力義務化されている³。災害弾力性の枠組みでいえば、「過去の災害について学び、次の災害に備える」ために、住民自らが住み続けている土地の地理的特性や災害履歴を理解し、過去の災害から学ぶ姿勢をもつことを通じて、将来の自然災害の被害を最小限にとどめる(=「災害抵抗力」を高める)ことである。

しかしながら、災害教訓を住民自らが「責務」であると認識することは容易ではない。調査チームは、観光の視点を導入することが、訪問観光者のみならず、地域住民に対しても、防災意識を高めるうえで有効性をもつのではないかという問題意識のもと、2016～18年度にかけて、福島県の磐梯山北麓の北塩原村裏磐梯地区と、東麓から南麓に位置する猪苗代町において、「自然災害に強い観光地」に向けた示唆を得ることを目的とし、災害の記憶を掘り起こして観光活用する可能性を検討するための調査研究に取り組んできた。

1888年に「噴火」した磐梯山の山麓は、明治以降もっとも多くの犠牲者を出した火山災害を経験している地域である⁴。2019年度からは、引き続き磐梯山麓において、これまでに蓄積した知見を

もとに、具体的な観光活用を試みることを通じて、「自然災害からの復興過程における観光の役割」について検討している。

本研究では、1888年の磐梯山噴火に関する記憶を掘り起して観光活用する試み(モニターツアーの企画と催行)を紹介している。本研究の目的は、このモニターツアー参加者の「評価」をもとに、参加者の自然災害に対する防災意識への影響を分析するとともに、ツアーに協力した地域住民への影響を検討することで、「防災教育と教訓の伝承」の仕組みづくりに、観光を通じた活動を導入することの有効性について考察することにある。

まず、本研究のベースとなっている、2016～18年度に調査チームが進めてきた一連の調査研究内容について概観する(第II章)。その後、それらをふまえて企画・催行されたモニターツアーについて紹介し(第III章)、参加者の評価を分析する(第IV章)。V章では、これらをふまえ、「防災教育と教訓の伝承」の仕組みづくりに向けた考察を加えることとしたい。

II—2016～18年度の調査内容

筆者ら調査チームが2016～2018年度にかけて繰り返し実施してきた現地調査の内容は、以下の3点に集約される。

1. 「慰霊碑」の実態調査

筆者らは、自然災害を経験した土地に建立された「慰霊・供養の塔や碑、記念碑等」(以下、「慰霊碑」)の有効活用の可能性に着目してきた。慰霊碑は、建立時には慰霊や供養、教訓等、さまざまな想いを込めて建てられたものであり、その想いや意義、価値を住民が十分に理解し共有できていれば、住民・訪問者双方に対して、土地や災害の記憶、そして先人の想いや知恵を後世に伝えてゆくための「物言わぬ語り部」となりえるものと考え

られる(橋本, 2018)。しかし現実には、時間の経過とともに住民の意識から遠ざかってしまう場合が多い。とくに津波や火山災害の慰霊碑は、気象災害と比べると、災害発生頻度が低いために、どうしても理解が進みにくい。

本調査では、⁵ 関連資料や現地での関係者への聞き取り調査等をもとに、北塩原村ならびに猪苗代町に現存する1888年噴火の慰霊碑を調査し、その主要なものに関して、建立場所・建立年の特定、建立された経緯や碑文の解説、現在の管理状況等について基礎データを収集し、観光対象として活用しうる可能性について検討を進めてきた。

調査を通して選定された北塩原村の5基、猪苗代町の4基については、18年度末に「慰霊碑マップ(図1)」としてまとめられている。

2. 被災集落での調査

2016年度には松原集落、早稲沢集落(ともに北塩原村)において、2017年度からは磐梯山東麓に位置する長坂集落、南麓の見祢集落(ともに猪苗代町)においての聞き取り調査と、住民の案内による集落内のフィールド調査を重ねてきた。

磐梯山東麓の長瀬川沿いにある長坂は、1888年磐梯山噴火の影響で河川に発生した泥流(土石流)によってもっとも大きな被害を受けた集落で

あり、93名の犠牲者を出した。南麓の見祢は噴火の直接的被害が及んだ南端の集落である。とくに長坂では、先代から聞き伝えられてきた1888年噴火時とその後の生活再建に向けた努力や苦労も含めた話を住民から聞くことができた。これらの成果は、見祢での調査内容とともに「長坂・見祢ジオマップ」(図2)としてまとめられている。

なお、図1ならびに図2に紹介したマップは、A3判両面刷りで作成され、磐梯山ジオパーク協議会、磐梯山噴火記念館、裏磐梯エコツーリズム協会等、現地の調査パートナーを通じて配布され、視察時のフィールド教材等としても活用されている。

3. 地元中学のフィールド学習への同行調査

猪苗代町と北塩原村では、毎年ほとんどの小中学校が「ジオパーク学習」の一環として、火山の特徴や噴火災害も含め、磐梯山地域を理解するフィールド学習を実施している。中でも猪苗代町立吾妻中学校は、教室での事前学習を受けたのち、9月に1年生が毎年2日間をかけて磐梯山周辺のフィールド学習を行うなど、「ジオパーク学習」をもっとも重視している学校である。

同校が2017年に実施した2日間のツアー行程は表1の通りである。1日目は1888年の噴火をテー



図1 調査内容をまとめた地図①
「磐梯山慰霊碑マップ」



図2 調査内容をまとめた地図②
「長坂・見祢ジオマップ」

表1 吾妻中のフィールド学習の行程(2017)

| |
|---|
| 1日目 |
| 学校出発(8:45) ・裏磐梯スキー場 ⇄ 銅沼 <small>アカヌマ</small> (徒歩1.7km) (昼食) ・長坂, 渋谷, 見祢集落 ・秋元発電所 学校到着(14:30) |
| 2日目 |
| 学校出発(8:45) ・土津神社 → 磐梯神社 → 土津神社奥の院 ・天鏡台 (昼食) ・猪苗代リゾートスキー場 ・猪苗代湖長浜駐車場 ・天鏡閣 学校到着(15:10) |

マとし、あかぬま磐梯山の噴火口にある五色沼湖沼群の水
源(銅沼), 噴火により被害を受けた3つの集落,
噴火による恩恵の一つである発電所を訪れた。2
日目は猪苗代湖や表磐梯を形づくることとなった
5万年前の噴火の痕跡と、磐梯山の山岳信仰等を
テーマとしている。

調査チームは、2017, 18年度と、同校の同意
を得てフィールド学習に同行させてもらい、説明
内容やそれに対する生徒の反応を観察・記録し、
フィールド学習の「効果」について考察した。⁶

同校では、フィールド学習後に毎年、生徒たち
がその内容を振り返る事後学習を行い、11月の文



図3 ジオフィールド学習の成果発表(2017)

化祭で発表している。2017年度は磐梯山噴火を
テーマとしたドラマ仕立ての発表を行った(図3)。

III——モニターツアーの実施

1. モニターツアーの企画とコース選定

1888年の磐梯山噴火からすでに130年を超える
歳月が過ぎた。この噴火は、裏磐梯という数多く
の湖沼群が点在する風光明媚な景観を生み出した
反面、多くの犠牲者を出し、現在もその聞き伝え
の記憶を抱えながら暮らす住民がいる。そして山
麓一帯には、ほとんど目を向けられることなくな
った慰霊碑がいくつも残されている。こうした
「自然の恵みと脅威」の両面に目を向けることが、
磐梯山周辺地域の住民、さらには災害大国日本で
暮らす私たちにとって、防災意識を高め、教訓を
伝承するためのメッセージを広めてゆく有効な手
だてとなると考えられる。

2019年度は、以上のような問題意識に沿って、
現地の調査パートナーと協議を重ね、上記のメッ
セージを、主に磐梯山周辺地域の住民に理解して
もらうことをテーマとしたモニターツアーを企画
した。⁷「磐梯山の恵みと災害の痕跡をたどる旅」と
名づけられたこのツアーの行程は表2の通りであ
る。

表2 モニターツアーの行程(2019年9月12日)

| |
|---|
| 9:00出発(北塩原村自然環境活用センター) 磐梯山噴火記念館 五色沼散策(青沼・るり沼・遠藤現夢の碑) 裏磐梯の慰霊碑(松原)と松原湖 |
| 昼食 磐梯山ジオパークカレー(休暇村裏磐梯) 長坂(住民の解説) 見祢(「見祢の大石」) |
| 15:30到着(北塩原村自然環境活用センター) (アンケート等) |

移動は北塩原村と猪苗代町の公用車各1台を利用し、参加費は噴火年に因んで1,888円とした。参加費には磐梯山噴火記念館入館料、昼食代、「磐梯山慰霊碑マップ」「長坂・見祢ジオマップ」を含む資料代、保険代、ガイド料を含んでいる。参加費は受付時に徴収され、2,000円を支払いお釣りを寄付してもらおうと、主催者である磐梯山ジオパーク協議会のバッジを提供する旨の説明がなされた。

2. モニターツアーの開催

ツアー催行日である2019年9月12日(木)の天候は曇のち晴、気温は18.7度(桧原, 正午)であった。ガイドはジオガイド(磐梯山ジオパーク協議会事務局支援員)の2名で、ともにガイド歴5年である。

ツアー規模は一般参加者12名(うち1名は昼食後に合流)、関係者17名の総勢29名で、2台の公用車に分乗して移動した。

一行はまず磐梯山噴火記念館にて、1888年噴火の様子やその後の裏磐梯地区の形成等についての展示を観て知識を共有した(図4)。

その後、噴火の影響によって形成された五色沼遊歩道を散策し、ガイドから地質や植生、水質の特徴等についての説明がなされた。遊歩道から脇道に入ると、噴火後の緑地化に尽力した遠藤現夢の碑がある。ここでは、ここに碑が建てられた経緯やその功績等が紹介された(図5)。



図4 磐梯山噴火記念館での「事前学習」

昼食後、午後最初に訪れた長坂集落では、慰霊碑を前にして、土石流による犠牲者がもっとも多かった噴火当時の様子について、先代からの聞き伝えを住民から直接聞いた(図6)。最後の訪問地である見祢は、噴火により直接の被害を受けた南端の集落であり、噴火直後の救護活動や報道の拠点となった地でもある。その証である「見祢の大



図5 遠藤現夢の碑を前にした解説



図6 長坂集落にて住民の話を聴く



図7 「見祢の大石」を前にした解説

石」(図7, 天然記念物)を前に, 噴火の規模の大きさや当時の様子についての説明を受けた。

IV——モニターツアーの評価

1. 参加者を対象としたアンケート結果

モニターツアー終了後, 一般参加者にアンケートへの協力を依頼し, 12名のうち, 昼食後に合流した1名を除く11名から有効回答が得られた。

参加者は20代から60代の男性6名・女性5名で, いずれも近隣市町村在住であった。ツアーを知った手段は「関係者に誘われて」8名, 「友人に誘われて」2名, 「磐梯山ジオパーク協議会のFacebook」1名であった。磐梯山ジオパークとの関わりについては, 「ジオパーク活動に関わっている」参加者が2名, ジオパークの「企画やイベントに参加したことがある」3名が含まれている。

アンケートは, 表3に示した各項目について5段階評価で回答を求め, カテゴリーごとに意見, 感想を記す自由記述欄が設けられている。各項目の得点は「満足できた」「理解が深まった」など最高評価を5点, 「満足できなかった」「理解が深まらなかった」など最低評価を1点とした平均値である。

2. 結果の分析

表3からわかる通り, 参加者の回答は総じて高評価である。全項目の中でもっとも高いのは, ガイドの「解説内容」(平均値4.8)であった。

立ち寄りポイントでもっとも平均値の高かったのは「長坂」(4.6)である。立ち寄りポイント全体に関しての自由記述欄に「印象に残ったこと」を記入したのは7名であり, うち5名が長坂の住民から話を聞いたことを挙げている。

ウォーキングコースの「歩く距離」, 「歩く速さ」は「ちょうどよい」を3点とした回答項目となっているために, 他の回答カテゴリと同列には比較

表3 参加者へのアンケート結果の概要

| 設問 | 回答 (平均) |
|---|---------------------------------|
| ガイドについて ・解説内容 ・解説の聞き取りやすさ ・接客態度 | 4.8 4.4 4.6 |
| 立ち寄りポイントの満足度 ・五色沼 ・慰霊碑 ・ランチ(ジオカレー) ・長坂 ・見柵 | 4.5 4.4 4.4 4.6 4.4 |
| ウォーキングコース(五色沼自然探勝路) ・歩きやすさ ・歩く距離(長さ) ^{a)} ・歩く速さ ^{b)} | 3.9 2.9 2.8 |
| 料金, 時間帯 ・参加料金 ^{c)} ・設定された時間帯 ^{d)} | 3.5 4.6 |
| 全体的評価 ・テーマへの理解 ・テーマの適切さ ・磐梯山エリアの魅力を味わえたか | 4.6 4.7 4.5 |
| 商品化に向けて ・商品化の可能性 ・ツアーの適正価格 | 3.7 3,089円 |

+評価を5, -評価を1とした5段階評価。

a) 「短い」5-「ちょうどよい」3-「長い」1点

b) 「遅い」5-「ちょうどよい」3-「速い」1点

c) 「安い」5-「ちょうどよい」3-「高い」1点

d) 「ちょうどよい」5-「どちらとも言えない」3-「よくない」1点

できないものの, 概ね高評価であった。ただし, 自由記述欄に「もう少し歩きたい」「もう少し沼を見たかった」「足元が悪かったので何回か躓いてしまった」等が指摘され, 関心の度合や歩き慣れによる評価の相違がみられた。

料金については, 「ちょうどよい」が5名, 「少し安い」「安い」が5名と, 無回答1名を除く全員が好意的な評価をしている。時間帯設定は2名を除き

「ちょうどよい」と回答しており、2名は自由記述欄に「少し長く感じる」「時間が長すぎる」と回答している。

全体的評価についても概ね高い評価が得られている。とくにこの3項目は、磐梯山ジオパークへの「関わりがある」と回答した5名全員から、5段階評価の最高得点(5点)を得ている。

全体評価についての自由記述欄でも、長坂で話を聞いたことに関連する内容が多く指摘された。「単にめぐるだけでなく現地の人の伝承等を聞くことで、より身近になった」「今後私たちが生きていくうえで必要なことを考えさせられた」等である。他にも、ツアーに参加したことで「磐梯山そのものや地形・地質だけではなく、災害としての噴火という面をとりあげていて、当時について、より想いを想像しながら歩くことができた」「さらに会津のことを知るチャンスとしたい」「火山災害と言ってもエリアによって全く状況が違い、本当に奥が深い。たくさんの人に知ってほしい」とい

う指摘がみられた。

「ツアーの商品化」の可能性については、「ない」と回答した1名を除き、「参加してみたい」と思う適正価格と商品化に向けたアイデアが寄せられた(表4)。可能性が「ある」と回答した10名のツアー適正価格の平均値は3,089円であった。意見として記された内容は「提案」と「感想」に分かれ、提案には「噴火記念館での説明(表4中:回答者①)」「移動への工夫の必要性(同:④⑦)」「食事について(③⑤)」等が、「感想」としては「ガイドの価値の高さ(⑨⑩)」が指摘された。

V——観光を通じた「防災教育と教訓の伝承」

1. モニターツアー参加者の防災意識の向上

今回のガイド2名は、五色沼遊歩道散策中に適宜植物の紹介を組み入れるなどの工夫がみられ、「ガイドの解説内容」(評価平均値4.8)、「接客態

表4 適正価格の評価と商品化に向けた意見

| | | |
|---------|-------------------|---|
| ① 20代 女 | 1,888円 | 最初の噴火記念館でこれから行くところのキーになることを説明いただいてから出かけたほうが理解がより深まるのではないかと。 |
| ② 30代 女 | 2,000円 | 学習旅行の一環ならとても素晴らしいと思う。ファミリー向けには子供の年齢を高めにしたと厳しい。 |
| ③ 40代 女 | 2,000円～ 3,000円 | 内容はよかった！もう少しランチのクオリティをあげた方が、今後につながる。 |
| ④ 20代 男 | 3,000円 | 移動が長く感じる所以对策が必要かも。 |
| ⑤ 40代 男 | 3,000円 | 昼食の他、スイーツ付きだったりしたらいい。 |
| ⑥ 50代 男 | 3,000円 | |
| ⑦ 30代 男 | 3,500円 | 久しぶりのジオツアーで楽しかったです。前職の栗駒では、ツアー中の“移動”について工夫していました。ジオパークの活動には大変意味と意義があると考えています。これからもよりいい活動を目指して、持続可能な地域づくりを続けていきましょう。 |
| ⑧ 60代 男 | 3,500円 | 500円を募金対象とする。具体的には今即答できません。 |
| ⑨ 40代 女 | 3,000円～ 5,000円 | ガイド付きツアーだからこそ、磐梯ジオパークの魅力を伝えられる地域を上げて商品パッケージングしている価値は大いにある。今日のモニターツアーのように、10人に1人ぐらいの少人数制のほうが満足度が高いと思います。とても面白かったです。 |
| ⑩ 40代 女 | 4,500円 | 価格の付け方は難しい。体験すると高いとは思わないが、体験する前の人を感じる金額と経費がどうか？ ガイドがとても価値を上げている。 |

度」(同4.6)はきわめて高い評価となっている。「商品化に向けての意見」の中でもっとも適正価格を高く設定した2人のコメントが、ガイドの価値の高さを指摘した参加者(表4:⑨⑩)であったように、ガイドの質はツアー全体の評価に大きく影響している。また、立ち寄りポイントでもっとも評価が高かったのは、住民の解説のあった「長坂」(4.6)で、住民と交流し、直接話を聞く体験の印象の強さが多くの参加者から指摘された。これらのことから、人的要素を介した活動の有無や質が、ツアー評価にとって重要であることが改めて指摘されよう。

被災当時の痕跡が残されていないと人びとの記憶は薄れてしまうが、何らかの形で残されていれば、現場で当時の様子を想像しやすい(佐藤, 2016)。慰霊碑については、「現地の方から話を聞くことにより慰霊碑に対する感じ方が変わった」との指摘もあったように、人を介した説明が加わることで再び息を吹き込まれ、建立当初の想いを伝える手立てとしてその価値が改めて見直され、自然災害に対する防災教育や教訓の伝承について考えるうえで有効な存在となりうるという示唆が得られた。

また、先に紹介した通り、全体評価の自由記述欄には、「さらに会津のことを知るチャンスとしたい」「火山災害と言ってもエリアによって全く状況が違い、本当に奥が深い。たくさんの人に知ってほしい」など、参加した機会を得て自らの住む会津や磐梯山地域についての見方が深化したことを指摘するコメントがみられた。

このように今回のツアーは、主催した磐梯山ジオパーク協議会に関係が近い参加者が多かったことを考慮する必要はあるものの、関心の高い参加者にうまくアピールすることができれば、かつて大きな自然災害に見舞われた聞き伝えを直接住民から聴き、現在穏やかな暮らしを続ける姿に接することで、外からは伺い知ることのできない土地

の履歴について学び、その地の重層的な暮らしぶりを理解することができるのみならず、自らの住む土地の防災の重要性を再認識する契機となっている。なかでも、普段なかなか訪れる機会のない、未だ被災の記憶を受け継いで暮らし続けている住民との交流は、ツアー参加者に強い印象を与えていた。

これは、フィールド学習に参加する生徒たちにとっても同様である。とくに近隣在住の生徒たちがフィールド学習に参加し、実際に災害のあった現場で住民から話を聴くことができれば、自らの住む土地の特性や災害履歴を理解するこれ以上ない機会となる。教室で学習するのみではリアリティに欠ける内容であっても、人を介することにより心理的距離が縮まり、理解も急速に進むであろう。

なお、商品化の可能性が「ない」と回答した1名の参加者は、長坂集落を除くと、回答全般において評価が低かった。この参加者は「友人に誘われて」参加したと回答し、設定時間のところで「時間が長すぎる」と記入していることから、誘われて参加したものの、ツアー全般において、他の参加者のような興味をもち続けられなかったものと考えられる。

今回のモニターツアーを実施しての改善点としては、最初に訪れた磐梯山噴火記念館で磐梯山地域の成り立ちや地質等を俯瞰してもらうことを意図していたものの、基本的に自由観覧であったため、ガイドや記念館のスタッフからその後の立ち寄りポイントについての説明があれば、より理解が深まったであろう点や、ランチの工夫に対する意見も聞かれた点等が挙げられる。

なお、このツアーの主題は、磐梯山周辺地域住民や磐梯山をある程度以上理解している訪問者向けであり、決して万人に向けられたものではない。そこに込められた意図に理解を示す層をいかに見出し、広報するかも課題として挙げられる。

2. 観光の導入による地域住民の意識変化

今回のような観光の視点を導入する試みは、ツアーを受け入れた地域住民に、どのような防災意識の変化をもたらすのであろうか。

2017年来私たち調査チームは、長坂集落を繰り返し訪問し、住民から、これまで外の人に話す機会のなかった被災時の言い伝えや、その後の苦勞を繰り返し聴くという貴重な機会を得た。住民にとってこの経験は、先人から言い伝えられてきた教訓を集落内で共有し、被災しながらも永年住み続けてきた風土の豊かさについての魅力を住民自らが改めて認識する契機となっていると考えられる。これを機会として、住民は慰霊碑を前にして訪問者に対して説明する機会が増え、その姿は回を追うごとに自信に満ち、落ち着いたものとなっている。外部との交流の機会が増えたことが、住民にとって、生活の新たなアクセントとなっているといえる。

慰霊碑に関しては、住民が説明できる体制となることでその存在が明確に意識されるようになり、存在価値が高まる。住民にとっては、訪問者という“外の眼”を通して慰霊碑を建立した先人の想いを自らが再認識できるので、慰霊碑は住民たちに「生活文化の宝」と認識されてさらに磨かれ、今以上に大切にされることが期待される(橋本, 2018)。

おわりに

観光の視点を導入し、住民と訪問者との交流の

機会を創出することで、住民には“見られている”ことによる刺激となり、訪問者にとっては、自然の脅威や大地の恵みを理解し、そこに暮らす人びとにリアリティをもって接することができることで、学びや体験の深みが増す。そして日常生活を見つめ直し、それが日頃の防災意識、さらには「災害大国」日本に生きる意味等々、大切なメッセージを伝える手段となりうる。こうした意味において、観光の視点の導入は、訪問者と住民とを結びつけ、両者の防災や教訓に対する学びを自然な形で推進するための仕組みづくりにおいて、有効な手だてとなりうるものと考えられる。

観光を通じた「防災教育と教訓の伝承」の仕組みづくりを持続的に進めるためには、防災教育や教訓の伝承に活用可能な資源のさらなる掘り起こしや、ステークホルダー間のネットワーク構築、次世代のガイド育成等が引き続き求められよう。今後も現地パートナーとの連携のもと、「防災教育と教訓の伝承」の仕組みづくりに向けて調査研究を進めていきたい。

〔付記〕

16～18年度は文部省科学研究費基盤研究B:16H03334「自然災害に対する観光地の「災害弾力性」に関する評価指標の開発」、本年度は同B:19H04383「自然災害からの復興過程における観光の役割に関する研究」によるものである。

なお、2013年度から継続する磐梯山地域での一連の調査は、現地の調査パートナーの協力あつてのものである。裏磐梯エコツーリズム協会、磐梯山噴火記念館、磐梯山ジオパーク協議会、そして長坂・見祢集落の皆様等、関係各位に感謝の意を表したい。

注

1 2011年の東北地方太平洋沖地震(「東日本大震災」)以降、福島県磐梯山地域においては、2013年度～15年度にかけて風評被害の現状分析とその影響について、16年度からは1888年の磐梯山噴火の影響に着目して「自然災害に強い観光地」に

向けた基礎調査を、立教大学観光学部橋本研究室、文教大学国際学部海津研究室の教員・学生による調査プロジェクトチームを組んで進めてきた。詳細は相澤・橋本(2015)、立教大学観光学部橋本研究室(2016)、橋本(2018)等参照。

- 2 災害心理学者の広瀬(2007)は、地域社会が有する災害への耐性について論じる中で、被害を最小限にとどめるための、何らかの社会的・経済的な条件等を備えているかという側面(=「災害抵抗力」と、被災後に速やかに立ち直ることができる条件を有しているかという側面(=「災害回復力」と)の組み合わせにより、社会を4タイプに分類している。観光地の「災害弾力性」は、この考え方を観光地に適用し、災害抵抗力と災害回復力の双方を高いレベルで兼ね備えた「弾力型観光地」を理想的な形として追及せんとする考え方である(橋本, 2016)。
- 3 2012年6月に改正された災害対策基本法に、災害の教訓を伝承することが「住民の責務」として明記され、国・地方公共団体、民間事業者を含めた各防災機関において防災教育を行うことが「努力義務化」された(第7条, 第46条, 第47条2項等)。
- 4 約70万年前に活動を開始したとされる磐梯山は、これまで幾度となく噴火を繰り返してきた。1888年の噴火は7月15日の朝、磐梯山の峰の一つである小磐梯が山頂付近より破裂したのを皮切りに15~20回爆発し、最後には小磐梯の山体が粉々になり北側の山腹を土砂が流下したものである。通常、噴火というと地下のマグマから溶岩が流れ出ることを意味するが、この時は、マグマによって地下水が温められ、それが水蒸気となって山体そのものを吹き飛ばすものであった。溶岩の噴出がないこの噴火は「磐梯式噴火」と呼ばれている。この「噴火」に伴う岩なだれとその影響で河川に発生した泥流(土石流)、そして爆風が、山麓の集落や温泉宿に大きな被害をもたらし、477人が犠牲になった。
- 5 磐梯山噴火百周年記念事業協議会編(1988), 米地(2006)他。
- 6 調査チーム参加学生による調査報告「防災教育におけるジオツアーの意義と有効性-猪苗代町立吾妻中学校のジオパークフィールド学習に着目して」2018年3月13日, 裏磐梯ビジターセンター。
- 7 主催: 磐梯山ジオパーク協議会, 協力: 立教大学観光学部橋本研究室・文教大学国際学部海洋研究室。行程を組むに当たっては調査プロジェクト参加学生の意見も取り入れている。
- 8 磐梯山ジオパーク協議会関係者(猪苗代町・北塩原村・磐梯町事務局, ジオガイド等)8名, 立教大学4(教員1, 学生3)名, 文教大学5(教員1, 学生4)名。
- 9 猪苗代町5名, 会津若松市3名, 磐梯町・喜多方市・会津坂下町各1名。
- 10 「2,000円~3,000円」のように価格帯での回答者については、その平均値(この場合は2,500円)として算出。
- 11 長坂住民山内愛子氏は、自らの集落の魅力について、「水のいいこと, 人のいいこと, 空気のいいこと, 人がいいことが一番」と、端的に表現している。

文献

- ✦相澤孝文・橋本俊哉 2015 福島県北塩原村における風評被害に関する住民意識の類型化 第30回日本観光研究学会全国大会学術論文集, 325-328.
- ✦橋本俊哉 2016 観光地の「災害弾力性」試論 立教大学観光学部紀要, 18, 90-98.
- ✦橋本俊哉 2018 磐梯山噴火からの観光復興: 「防災教育と教訓の伝承」の視点から 立教大学観光学部紀要, 20, 16-26.
- ✦広瀬弘忠 2007 災害防衛論 集英社
- ✦立教大学観光学部橋本研究室 2016 観光資源の持続的活用による風評被害の克服に関する研究
- ✦佐藤公 2016 科学博物館は自然災害をどのように伝えていくべきか 博物館研究, 580, 18-21.
- ✦磐梯山噴火百周年記念事業協議会編 1988 磐梯山噴火百周年記念誌 ぎょうせい
- ✦米地文夫 2006 磐梯山爆発 古今書院

